

吉元昭治

本学会総会において、すでに『金瓶梅』『紅樓夢』の、「中国医学と道教」について発表したのが、今回は『西遊記』についてふれてみたい。

『西遊記』はいうまでもなく、明代の四代奇書の一つとして『三国志(演義)』『水滸伝』について世に出たもので、『平妖伝』『封神演義』などと共に神魔(怪)小説といわれることもある。

ところで、『西遊記』は、他の『三国志』、『水滸伝』と同じく、歴史の事実が、街の講釈師によって語られ次第に人々の間に滲透、迎えられ、ついで今日の京劇のテーマにとり入れているように舞台上で演じられるようになり、これを受けて多くの人が、時間をかけて一つのストーリーにまとめられていったと考えられる。

従って現在『西遊記』といっても幾種のものがあるわけである。ストーリーのベースは、実在した、唐の玄奘三蔵(五九六?~六六四)で、彼は仏典を求めはるるインドに旅立った。この事蹟を玄奘の高弟、辨機は師の口述をもとにして『大唐西域記』を、また同じ弟子の慧立と彦棕は『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』を遺している。しかしこれは歴史であり、小説『西遊記』では、玄奘はその主役の座を孫悟空(孫行者)にゆずって、決断力がなく、弱々しくもあり、いわゆる八十一難に遭遇しては、悟空を初めとする弟子達の力で、さらには大慈大悲救苦救難靈感観音菩薩などの助力で無事危機を脱する極めて人間的な姿となっている。

この『西遊記』の物語は、南宋時代すでに『大唐三蔵取経詩話』という講釈師の台本があり、ついで元代末になると『西遊記』という名称の書がでている。有名なチングス・ハンのもとを訪ねた丘長春が書いた五年間のその道中記『長春真人西遊記』と混同され丘長春がその著者とされたことがある。丘長春は、現在北京の道教全真派総本山の白雲觀のもとをつくった人である。

明代になると、五種ばかりのものが世に出たが、このうちの『李卓吾先生批評西遊記』の百回本があり、最も早く出たいわゆる世徳堂本と内容はほぼ同じだとされている。岩波版『西遊記』（小野忍・中野美代子氏訳、未完）はこれによっている。

清代になると、『西遊証道書』が最も早く、ついで『西遊真詮』（真詮とはまことの悟りという意味、康熙三十三年、一六九四年、編者は、陳子斌、号は悟一子。）という百回本が、その内容が常識的で平易でもあるので世にうけられ、『西遊記』といえば、これを指すものといわれるようになった。平凡社『西遊記』（太田辰夫・鳥居久靖氏訳）はこれによっている。『西遊記』の原作者は、一応、呉承恩（一五〇〇?～一五八二）とされている。一応というのは、これを疑問視する説もまた有力であるからである。

さて、『西遊記』の中国医学と道教との関係については総会の席で発表するが、この書の内容はいろいろ部分を含み、膨大なものであるから整理、系統をたてる試みが痛感された。その一部を最後にふれておく。

最も中医学的な部分は、朱紫国における、孫悟空の医

療活動である。彼は国王の病を癒し無事、第五十六の難をきりぬける（第六十八、第六十九回）、また、薬名をおりこんだ詩も二箇所に見られ、その他、薬草の名・六字訣のごときものもある。

『西遊記』は一応、仏典を求めるといって、仏教的なように見えるが、道教と混然としていたり、道教と対立している場面が数多い。孫悟空初め二人の弟子は、「悟」という名がついていて一応仏教的だが、悟空は、初め須菩提祖師という仙人から七十二変化の術を教わっている。また三蔵をふくめた一行五人のからみ合いは五行説なしでは理解できない。

（順天堂大学医学部産婦人科学教室）